

寝取られものの主人公  
になりかけてるのでどうにかする

コーク厨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

読んで字のごとく、NTR物の鉄板主人公になつてしまつたのでどうにかする。  
NTR物に触れて鬱になつてしまつた作者が自己満足の為に書いた小説です。

目

次

寝取られものの主人公になりかけてるの  
でどうにかする  
別人の話

16 1



寝取られものの主人公になりかけてるのでどうにかする

「お兄ちゃん……大好き♡」

「ああ……俺も大好きだよ……」

今、俺は幸福の絶頂にいる。

愛する女と結ばれ、これ以上のない絶頂にいる……

「ねえ？　お兄ちゃん、私ね？　お兄ちゃんに隠していた秘密があるの……」

しかし、俺の絶頂を邪魔する落とし穴がある……

「ん？　どんな秘密かい？」

「私ね……　実は！　お兄ちゃんが大好きな神奈ユイだつたんだあ！」

知ってる

「え？　あの人気アイドルのかい！　そうかあ……似てる似てるとは思ってたけど、まさか本人だつたなんて……」

「うん……　秘密にしててゴメンね？　でもでも、これからはお兄ちゃんだけのアイドルだよっ！」

「ああ、夢みたいだなあ……　こんなに幸せだなんて……」

俺はこの幸せを保ち続ける……

保ち続ける為に様々な準備をしてきた……！

「もう一生離さないからな、優香……！」

「うんっ！ 悠お兄ちゃん！」

ふと目が覚めた時、俺は自分の立ち位置を理解した。

ある作家が書いたNTRものエロ漫画の主人公である、『独 悠』だと自覚してしまったからだ。

悠は極々普通の青年だが、優しい性格をしていて、昔からお兄ちゃんお兄ちゃんと慕ってくれる年下の幼なじみである『鹿目 優香』と念願叶つて付き合うことになる、そしてその幼なじみが自分が大好きなアイドルである『神奈 ユイ』だと知り、幸福の絶頂に立つ。

しかし、付き合っている事がパパラッチにバレ、炎上。

事務所に損害賠償として1億を請求され優香は相談することも出来ずに借金の肩代わり申し出た株主に出された条件として株主の家に行き寝ることになり……

というのがマンガの内容である。

ごくありふれた内容のNTRものの導入であるが、自分が当事者となつたらそう樂観視出来なくなつた。

しかし俺には2年という時間があつた。

そして前世で覚えたことは今の身体でも一通り出来た。

何より俺は優香の事を愛していましたし、可愛い優香があんなおっさんの物になるのが我慢ならなかつた。

そうして俺は、このNTRマンガをぶち壊す為に動き始めたのだつた。

『人気アイドル神奈ユイの素顔！』

『清純派の皮を被つた淫乱なアイドル！』

「おいつ！ どうしてくれんんだこの記事つ！」

「すつ、すみません……！」

私、鹿目 優香は幸せの中にいるはずだつた……

小さな頃から大好きだつた、兄と慕う人と結ばれて……

4 寝取られものの主人公になりかけてるのでどうにかする

何度も何度もお互いの愛を確かめ合つて……

「ウチの信頼はボロボロ……！ どうしてくれるつー！」

「本当にっ！ 本当にすみません！」

だけど、詰めが甘かつた。

私達がキスしているところを写真に撮られちゃつた……

当然、外でした訳じや無い。

少しだけ空いていたカーテンの隙間から盗撮された。

「おい…… 当然賠償はしてくれるんだよな……？」

「……！ はつ、はい……！」

「払えるんだよなあ！」

「頑張つて……払いますっ……！ 幾らですか……？」

「ざつと1億だよ」

「いつ……1億……？」

そんな大金用意出来る訳ない。

アイドルとして稼いだお金はあるけれど、それを全部つぎ込んでも全然足りない……

「なあ……？ もしかしてだけど払えないのか……？」

！

「そつ……そんな大金は直ぐには……！ で、でもっ！ ちゃんと払いますっ！ 働いてお稼いで絶対につ！」

「今すぐ必要に決まつてんだろうがつ！」

「バンッ！ と机を叩いて脅され、小さく悲鳴が出てしまう。

「…… おいつ！ ちょっとまつてろ！」

突然、社長が立ち上がり電話をどこかにかけた。

なんか新しい女がどうとかいくらで買いますかとかなんとか言つてゐるのが聞こえた。

少し経つてから電話を切つた社長がこんな話をしてきた。

「今、うちの株主の方に連絡をした。そしたら、お前の態度次第では、1億を肩代わりしてやつてもいいとの事だ。」

「え？ ほ、本当ですか!?」

「ああ、その方の出す条件を飲めばの話だがな。」

「その、条件つて言うのは？」

「ああ、簡単な事だ、後日その方の家に行つてお前についてじっくり教えてくれればいいとの事だ。それで1億稼げるなら全然安いものだろう！」

「え……？」

自分についてじっくり教える、というのは、枕営業の事らしい。

## 6 寝取られものの主人公になりかけてるのでどうにかする

噂程度でしか知らなかつたけれど、本当の話だつたんだ……  
で、でも、枕営業なんてやりたくない…………！

「どうする…… 受けるのか!? 受けないのか!?」

「す、少し考え方させて下さい…………！」

「ダメだつ！ 今決めろ！」

「そ、そんな……」

「おいつ！ 1億払えないんだろう!? 払えないならさっさとこの話を受けろつ！」

何度も何度も机を叩いて威圧してくる。

やだつ！ 怖いつ！ でも1億円なんて払えないつ！ 枕営業なんてしたくないつ  
！ お兄ちゃん以外とえつちなことなんてしたくないよお！

「先方の気が変わつたらどうするんだよつ！」

「ひつ…………！」

やだつ！ 助けてつ！ お兄ちゃんつ！ お兄ちゃんつ！ お兄ちゃんつ！ お兄ちゃんつ！ お兄ちゃんつ！ お兄ちゃんつ！ お兄ちゃんつ！ お兄ちゃんつ！ お兄ちゃんつ！

「その話つ！ 一寸待つて貰えませんかね？」

「…………え？」

「…………あ？」

応接室の扉を蹴破つて現れたのは…………

「ごめんな、怖かつたろ？ 優香」

大好きなお兄ちゃん王子様でした。

お兄さんは私を優しく、そしてしつかりと抱きしめてくれた。  
ああ……お兄さんにぎゅうってされると安心するなあ……

「お前っ…………どの面下げてここに来たんだっ！」

入つてきて私を抱きしめてくれるお兄さんに社長が怒鳴り声を上げる。

「まず最初につ！ 俺の行動の結果この事務所の皆様方に迷惑をかけた、その事はお詫び申し上げます」

お兄さんが事務所のソファに座つたので、私も横に座る。

「そんなことつ……！」

私が気を遣えなかつたから……！

1番迷惑かけたのは私なのに……！

「良い、優香。俺が注意をしつかりと払わなかつた」とが原因でもある」

「お前のせいであつ！ ウチはボロボロだつ！」

「わかつてます、わかつてますとも」

「なんだその態度つ！ ふざけるなつ！ 払えつ！ お前もつ！ 賠償金払えつ！」

「そんなん！ 私だけじやなくてお兄ちゃんにも……！」

「ええ、払わせて頂きますとも…………」

「でもなあ…………！」

お兄ちゃんが机に思いつきりかかと落としを決め、すゞい音がなつた。

「女売つて金儲けようとするのは違えんじやあねえかなあ!?」

え？

「ええ！ 社長さんよオ！ お前さん今売つたよなあ！ 優香をつ！ 2億でつ！ 売

り飛ばそとよなあ！」

「売り飛ばすだとつ！ 人聞きの悪いつ！ その女のせいで出来た負債をその女に払わ

せるのは当然の事じやないかつ！」

「ああその通りだ、負債は払わなくちやならねえ…… でもなあ！ だからといつて金

持ちに女斡旋して回収しようとする挙句、更に儲けようとするのは違えじやあねえか！」

「ええ!? これまでに何度もやつてきたんだろ!? 可愛い未来あるアイドルを何人か人かいふことを思い出した。

お兄ちゃんがそう言つたのを聞いてふと、デビューしてから見かけなくなつた子が何マネージャーに聞いても、辞めたの一点張りだつたから、本当に辞めたんだと思つたけど……

「どつくて調べはついてんだよつ！ お前らグルで何人も沈めて来てるつて事はつ！」  
「ふんつ！ なんの事だか検討もつかんなつ！ それより払えつ！ 賠償金つ！ 今ここで！ 一括で！ 出来ないなら口を挟むなつ！」

一括なんてそんな無茶な……！ 払えるわけないつ！

「ツチ！ 口を開けば金金金…… 人間のクズめ…… まあいい！ 1億だつたか……?  
？ 用意してやるよ！ この場に！」

「……は？」

「用意してやるつて言つたんだよ！ 1億！ 現金でつ！」

「ふ、ふざけるなつ！ そんな大金お前みたいなやつが持つてるわけ無いだろうが！」

「そ、そうだよお兄ちゃん！ 無茶な事はしないで！ 私は大丈夫だからっ！」

そうお兄ちゃんに声をかけると、お兄ちゃんは私につっこりと微笑んで、優しい声で語りかけてきた。

「ごめんな、優香……俺、お前に隠していた秘密があるんだ……」

「おいっ！ 入つてこいつ！」

そうお兄ちゃんが声を外にかけると、黒ずくめの怖い外人さん達が何人も部屋の中にトランクケースを持って入ってきた。

「そこに置け」

そしてお兄ちゃんは外人さん達を顎で使っている。

「お、お兄ちゃん……？ この人達……誰？」

大丈夫なお兄ちゃん？ 何かすごい怖いよこの人達？

ほら、事務所の人もみんな顔青ざめてるよ……？

社長さんなんて青ざめるどころか土気色になつてるよ？

「優香」

短く名前を呼ばれお兄ちゃんを見上げると

「俺、実はマフィアの幹部なんだ」

と、全く予想だにしない一言を私に向けて発するのだった。

このマンガをぶち壊す決意をした俺がまず最初にやつた事はバスポートの取得。幸いにして、俺は成人していたのですんなりと行つた。

言語に関するても、前世で4ヶ国語を喋れた俺には問題無かつた。  
向かつた先はイタリア、マフィアの總本山である。

そこであるマフィアの構成員に取り入り、まずはファミリーに入り込んだ。

次は幹部の1人を殺し、そいつの隠し財産を奪い取りその金で幹部になる。  
そして今の組織に不満を持つ者達と結託し、組織に反旗を翻し抗争を仕掛けた。

抗争に勝利した俺たちは見事に組織を乗っ取り、俺は安寧の地位を手に入れることに成功した。

幹部として莫大な利潤を上げ、総資産は11桁に到達した。

そして悠々と日本に帰国、地元のヤクザとも話をつけ、今この事務所に乗り込んで来た訳だ。

何度も何度も命の危機に陥ったが……

人間死ぬ気になれば何でも出来るものだな、やっぱ。

相手は金持ちであり、組織である。芸能界との癒着も激しいだろう。

そういう相手と戦う時に必要なのは同じ組織の力と金の力であると思い至つた。  
そして今、ここで、実際に役に立っているわけである。

「優香、隠していて済まない」

まだポカンとしている優香に話しかける。

正直、話すのは嫌だった。

反社会的勢力であるのは間違いないし、この地位を築くまでに何人も殺してきたから  
だ。

これで愛想をつかされても、それは仕方のないことなのだと受け入れるしか：

「……え？ あっ！ ううん！ 全然問題無いよ！ たとえお兄ちゃんがどんな過去を  
持つていて、どんな人であろうと！ 私はお兄ちゃんが大好きだもん！」

思わず、涙が出てきた。

ああ、本当に、本当によかつた。

この天使の様な子が、俺を受け入れてくれて本当に嬉しい。

そして、この天使の様な子が泣かずに済んだことが何よりも嬉しい……！

「さあ！　社長さん、1億はこの場で用意した！　足りないというなら俺の分でもう1億あるつ！　これでもう文句はないだろう！」

「はつ……はいつ！　こ、これまでの態度、誠に申し訳ございませんでしたっ！　何卒……！　何卒命だけは……！」

「お前の命なんざ貰つてもいらねえよゴミクズが」

「さ、家へ帰ろう、優香」

「表に車を停めてあるんだ、車の中で少し話そう」

そうして、この事件については一応の決着を見せたのだった。

「ねえねえお兄ちゃん？　まふいあ？　の幹部？　って話なんだけど、いつの間にそんなのになつてたの？」

「ああ、俺が放浪の旅とか言つて半年くらい家を開けた時あつただろ？　あの時だよ」

「え!?　そのあいだお兄ちゃんイタリア行つてたの!?」

「まあ、そうなるな」

「ええ～！　するいざるい！　私もイタリア連れてつて欲しかった！」

「あのなあ……　遊びに行つたわけじや無いんだぞ？」

「でも本場のピザとか食べたんでしょ」

「ああ、凄い美味かつた、やっぱり本場は違うな」

「ずるうい～！」

「ははっ！　すまないすまない、でも、優香も直ぐに味わえるさ」

「え？」

「俺たちの間ではカタがついたが、世間一般ではまだこの話は終わっちゃいない」

「そつか……　家族にも迷惑がかかつちゃったんだね」

「ああ、俺の家族はもう居ないからどうとでもなるが、優香の方はそもそも行かないだろう？」

「だから、優香」

「家族揃つて、しばらくイタリアに行かないか？」

「金とか、向こうにいる間の事とかは心配しなくていい、全部俺が面倒見てやれる」

「一緒に暫くヴェネツィアで優雅に暮らそう」

「…………うんっ！　うんっ！　私はもちろん行くよお兄ちゃん！　お兄ちゃんの隣が私のいるところだもん！」

「よかつた、じやあ、おじさんとおばさんを説得するの手伝ってくれるか?」  
「うん!」

「よし! さあ、着いたな」

「おいっ! あんまり急いで降りるな!」

「お父さん! お母さん! ただいまっ! 一緒にイタリア行こーっ!」

## 別の人の話

私の幼馴染みは変な奴だ。

生まれた頃からずつと一緒で、ずっと変なやつだと思つていたけど、小学校に上がる頃からもつと変なやつになつた。

変な言動が多くて、みんなから少し距離を取られていたけど、私達はよく遊んでいた。まあ、あいつが体を鍛えているのを一方的に見てたとも言えるけど……：

あいつがどんな奴で、何を考えてるのかはイマイチ分かりずらいけど、それでもあいつの優しさを知つていた私は、そんなあいつが大好きだつた。

「ねえ、傑すぐる……？」

隣にいたあいつにそう声をかけると……：

「俺をその名で呼ぶな……」

「俺の名は拳聖……！　ありとあらゆる流派を超越した、史上最強の男……！」

「馬鹿な事言わないっ！」

そう言つて目の前のお馬鹿の頭を小突く。

そう、私の幼馴染みであり恋人でもある『朝英 傑』<sup>あさひで すぐる</sup>は重度の厨二病だ。もう高校二年生になるっていうのにこいつは……

ていうか何？！　拳聖つて？

アニメや漫画じや無いんだから……  
「ふむ、<sup>かなで</sup>奏よ」

「何？」

「やはり君はいい拳をしている。俺の弟子になりさえすれば俺より強くはなれなくとも、この世界2位くらいにはなれるやもしれんぞ？」

「はいはい、さいきよーさいきよー」

「む？　本気にしていないな？　よかろう。ならば奏に俺の究極奥義、裂破千激をお見せしよう……」

「はいはい、きゅうきよくきゅうきよく

「ふむう……　裏の世界においてこの男を手にした国がこの星を獲るとまで言わせたこ

の俺の究極奥義をこんな間近で見れて、なおかつ弟子にもなれるんだぞ？」

「うんうん、うらのそしきうらのそしき」

「強くなりたいのならカラテあるのみだぞ？」

「はーい、空手空手……って、全ての流派を超えてるんじゃないの？」

「空手ではなくカラテだ。それはそれとして、お得だぞ？ バリューパックだぞ？」

「今なら俺特性拳聖Tシャツまで付けちゃうぞ？」

「誰もいらないよ、そんなダサいTシャツ」

「なんと！」

と、やつぱり言動は変な奴なんだけど……

「……む？ あそこに見えるのは……」

「どうしたの？」

「いや、少しここで待っていてくれ」

「はいはい、また何時ものね」

「ああ、迷惑をかけるな」

「ううん、私は傑のそんな所が大好きなんだから、いつてらっしゃい」

「そう言うが早いか、

「ふつ！」

という声と共に傑は消えてしまった。

発生した強大な風に思わず顔を顰める。

もう少し周りを考えてくれると尚更かつこいいんだけどなあ？

なんて思いながら少し待つていると、

「すまない、待たせてしまったな」

そんな事を言いながら、傑が音もなく私の隣に現れる。

「ううん、大丈夫」

「それより、今回は何だったの？」

「何、いつも通りチンピラがよからぬ事を企んでいたので少し懲らしめてやつただけだ」

「そう、お疲れ様」

「疲れるほどのことでも無い」

「こんな風に、さも当然つて感じに人の為に行動できるこいつが、私はどうにも大好きなのだった。」

さて、と 今日着ていく服はバツチリだし、電車の時間にも間に合うようにそろそろ出ようかな?

なんて考えていると、2階から傑が降りてきた。  
窓から入つて来たのかな?

「む? 奏よ、出かけるのか?」

「うん、今日は友達と買い物行くんだ」

「ふむう、そうか、気をつけて行けよ?」

「大丈夫に決まつてるでしょ?」

心配性だなあ、傑は。

そんな所も可愛くて大好きなんだけど。

「本当か? 知らない人について行つてはダメだぞ?」

「そんな子供じやないんだから」

「お菓子をあげるつて言われてもだぞ!」

「子供じやないんだから! 全く、それに」

「うむ?」

「もしもの時は助けてくれるんでしょ? 一拳聖さん?」

そう言うと傑はニッコリと笑つて。

「…………うむ！ そうだな！ もしもの時は天に向かつて叫ぶがいい！」

なんて言つてきた。

期待しちゃうんだからね。

「それじゃ、行つてきます」

「うむ、いつてらつしゃい」

そう言つて家を出た。

あ！ 忘れ物！

「傑！ 忘れ物しちやつた！」

「どうした？」

まだ玄関前に立つっていたのか、そうそう帰つてきた私に驚いている傑の口を奪う。

「えへへ、いつてらつしゃいのちゅー だよ？」

「え…… あっ…… あ、ああ……」

もう、そんな気の抜けたリアクションされたらこつちまで恥ずかしくなるじやん！

「じゃ、じゃあ！ 今度こそいつてきます！」

「お、おう、いつてらつしゃい」

電車を乗り継ぎ1時間ほど、街の中心辺りで合流した私は、大親友の加奈かなとゆつくりとショッピングを始めた。

「あ！ あれ有名なお菓子屋さん！」

「え？ お菓子!? 行こ行こ！」

でもお菓子屋さんの方には沢山の人が並んでいた。

「でも凄い並んでるよ……」

「今回は諦めてまた今度にしない？」

「うん、そうだね」

なんて会話をしていると、唐突に声をかけられた。

「ねえねえ？ 君たちあそこのお菓子、気になるの？」

振り返るとそこには、優しげな風貌をした男性が立っていた。

「え？ どちら様ですか？」

「ああ！ ごめんごめん、怪しいものじゃないんだよ」

「僕はこういうもので……」

そう行つて差し出してきた名刺には、すぐ近くにあつた芸能会社の名前と、スカウト部の文字、そして男の名前だった。

「君たち、モデルに興味無い？」

「え？ 私達ですか？」

「そうそう、二人とも可愛いし、スタイルいいからどうかな？ つて」「でも……」

そう私が渡ると、

「とりあえず少し話そうよ？ ほら、あそこのケーキもあるし」

男はさつきのお店のケーキが入った箱を見せてきた。

「別に話を聞いてやつぱりって言うのも全然いいし、とりあえずさ？」

「でもやつぱり……」

「奏ちゃん、奏ちゃん！ こんなチャンス二度と無いよ？ 少しだけお話を聞いてみようよ！」

そう加奈に言われ、私はそこまで言うなら……、と渡々その男について行くのだった。

ビルの一室（男が言うには休憩室らしい）に案内された私達は、ケーキとお茶を出されしばらく待たされる事になつた。

「わはあー！ このケーキ美味しいね！ 奏ちゃん！」

「うん、流石に有名店なだけあるよね」

「一緒に出してくれたこの紅茶も取つても美味しいし、来てよかつたね！」

「もう、加奈は単純なんだから……」

「そうやつて少し話をしていると……」

「でも……変だね……なんだかすこし……」

佳奈の様子が変だ……！

「ぱーっとしてるし、顔も赤い……」

「加奈？　どうしたの？」

「頭が……　ぱーって…………」

そう言うと佳奈は黙り込んでしまった。

「加奈？　加奈！」

声をかけながら肩を揺らして起<sub>レ</sub>こううとすると、

「はーい、余計なことしないでねー」

「あれ？　薬効いてないのかなー？」

さつき声をかけてきた男がニヤニヤとこちらを見ていた。

「加奈に何をしたの！」

「大丈夫大丈夫、ちょっととぱーっとしてるだけだからねー」

「あ、とりあえず君はもう動けないから」

は？ と思ひ立ち上がろうとすると……

「動けない……！」

「うんうん、じゃあちよつと待つててねー？ とりあえずこっちの子パコるから」

「勝手なこと言わないで！」

「じゃ、加奈ちゃん？ お洋服ぬぎぬぎしようねー！」

「……はい……！」

「加奈……？ 加奈！ そんな奴の言いなりになっちゃダメ！」

「ああ！ 聞き忘れてたよ、君達処女だよね？」

男の質問に背筋が氷り、嫌な汗がたらたらと落ちてきた。  
き、気持ち悪い……！」

「……はい、処女……です」

「良かつた！ で、奏ちゃんは？」

「近寄らないで！ 気持ち悪い！」

「おやあ？ そんな態度どるんだ？ で？ 処女なの？」

「答えるわけないでしょ！」

「はあ、そういう態度取るなら、直接確かめちゃおつかなー」

「ひつ！」

やだ！ やだ！ やだ！ やだ！ やだ！ やだ！

「やだ！ やだ！」

「ほら、そんな日で睨んでも興奮させるだけだよ！」

「気持ち悪い！ 気持ち悪い！ 気持ち悪い！ 気持ち悪い！」

「気持ち悪い！ 近寄らないで！」

「そんなに嫌なら辞めてあげてもいいよ？」

……え？

「君がどうしても嫌なら君には一切手を出さないよ？」

「そんなの……！」

「でもお……」

「代わりに、加奈ちゃんにいっぱいお相手してもらうからねえ！」

「そんな……！」

「加奈にそんな酷いことさせる訳には行かない……

「いいよいよ！ 全然いいよ！ 加奈ちゃん可愛いし、壊しがいありそだし！」

「……し……」

「君は無事で帰れるし、僕達は都合のいい便器が手に入る！　お互に損しないね！」

「……します……」

「いやあー！　加奈ちゃんどうなつちやうかな!?　クスリで廃人になつちやうします！　相手しますから！」

おやあ？」

「私がやるから……　加奈に酷いことしないで……」

「相手しますう？　そんな上からの態度で要求しても聞かないよ？」

『大好きな親友の代わりに私の処女を貰つて、そのまま一生肉便器にしてください』つて土下座しながら言つたら考えてあげるよ』

そんな……！　そんな最低のこと言わされながら土下座なんて……

「な……！　そんなこと言えるわけ」

「言わないの？　加奈ちゃんに酷いことしちやうよ？」

「ま、待つて！」

悔しい……

こんな最低な奴らに身体を好き放題されるなんて嫌だ……

「……だ……」

「大好きな……」

大好きなアーツの為にずっと綺麗にしてたのに……

「土下座!!」

「大好きな……親友の代わりに『そんな事を言う必要は無いぞ奏よ!!!!』  
……へ?」

瞬間、物凄い轟音が鳴り響いた。

「すまない、待たせてしまったな……」

そう言つて壁をバラバラにしながら入つてきたのは……

「だがあもう、大丈夫だ……!!」

自分を最強と言つて憚らない、大好きなあいつだつた……!

「奏よ、知らない人にはついて行つてはいけないと言つたはずだつたがなあ?  
ちが……! 私はやめようつて言つたよ!」

「ふむ? そうだつたか」

こんな状況で言つても説得力無いと思うけど……

「誰だ! お前! どこから入つてきた!?!」

男が怒鳴りながらこちらを睨んでいる。

さつきまであんなに恐ろしく、気持ち悪く感じたはずの男が全然怖くない。  
すぐ隣に傑がいるからだろうか? 安心感が凄い。

「どこから、つて見れば分かるだろう……」

「壁を全て破壊して入ってきた！」

「はあ!? コンクリート製だぞ!!」

確かに、すっかり忘れていたけどコンクリートの壁を叩き割っているんだつた。  
とんでもない馬鹿力……

「ふむ、だからなんだというのだ?」

「しかも、他にも人が30人はいたはずだ！」

「ああ、あのゴミクズどもか…… クシャクシャに纏めてゴミ箱に捨てておいたぞ」  
ゴミつて……

「あ、有り得ねえ!? お前……なんなんだよ!」

「俺か……? 良いだろう、答えてやる!!!」

「俺の名は拳聖!!! ありとあらゆる流派を超えた、史上最強の男!!!!」

はああ……傑カツコイイなあ…… 好き……

は！ 違う違う！ こんな時にカツコつけないでよ！

「んな!? 拳聖だと!? 裏世界の最大戦力がなんでこんな所にいやがんだ！」  
え？ 何その反応？ ほんとに拳聖つて有名なの？

「貴様らが手を出した奏はなあ…… 我が生涯の伴侶なのだよ!!!」

「ふえ!?

突然出てきた言葉に思わず顔が真っ赤になってしまった。

何言つてんの!? 恥ずかしい!

「くそ! ふざけんな!」

そう言つて男が懐から拳銃を…… 拳銃!?

傑、危ない! 逃げて!

「ふむ、銃か。確かに強力な武器だが、俺には効かん、分かるか?

俺の……この拳聖の肉体がア! 音速より少し早い程度の鉛玉で貫けると思うなア

!!

はえ!?

拳銃が効かないって何!? でも実際に撃たれてもぴんぴんしてると、もう何発も撃ち込まれてるのに当然のように高笑いしてる!? ほんとマンガじやん!?

私の中の常識が、音を立てて崩れていってる……!

「つくそ! この化物が! 仕方ねえ!」

「テメエ動くな! もし動いたらこの女の頭をぶち抜く!」

そう言つてもう一人の男が加奈の頭に銃を突きつけてこちらに叫んだ。

「加奈!」

大変…… 加奈が……！

「安心しろ、奏」

「でも、加奈が」

「ふむ、奏よ、こうなつた時の最適な手段はなんだと思う？ 相手の要求を飲む？ それもまた正解だろう。だが俺はこう考える」

傑がそう言つた次の瞬間——

「ぐぎや!?」

「ひぎやつ!?」

傑の腕の中に加奈がいて、男達が倒れ伏していた。

「そもそも相手が認知出来ない速度で動けば関係なかろう？」

……………え？

「何が起きたかわからないつて顔だな？ 奏よ、ならば説明してやろう！ 人の反射は限界で0・1秒と言われていて、つまりそれ以下の時間で行動を終わらせてしまえば相手が引き金を引くよりも速く人質を救出し奴らを叩きのめす事が出来るというわけだ！」

うむ！ 実体験の伴つた、完璧な理論だな！」  
 ……え？ つまり傑は、0・1秒以下で数m離れてる男を叩きのめして、加奈を助け出したの……？

うん？

うん！ さすが私の幼なじみ！ なんかもうよくわかんないけど、どうでもいいや！  
傑好き！ ありがとう！ 大好き！ かつこいい！ 好き！

「さて、奏、帰ろうか」

「帰りに、ケーキを買って帰ろう、美味しいそうな店を見つけたんだ」  
ケーキも好き!

あの事件からしばらく経つて、私と傑はデートを楽しんでいた。

あの後すぐ、加奈も意識をハツキリとさせた。

なんか紅茶に混ぜられてたクスリのせいでいうことをなんでも聞くようにされてたらしい……

そのクスリにも強い依存性があつたらしいんだけど、なんか傑が、「ハアッ!!!」って気合い入れて加奈に正拳突きをしたら無くなつたらしい。

なんでも、正拳突きの威力で時空を歪めて、クスリの影響を受けた部位の時間をどう

たらとかなんとか…………

何言つてゐのかわからんし、目の前で見てる時も何が起こつたのかわからなかつた。

でも事実依存性が跡形もなく消えてるし、クスリの影響も、なんなら服薬した時に起こつた反応の跡すら身体から消えてた。

本当に意味がわからぬ。

でも、これだけは言える。

私の大好きな幼馴染は、世界最強で、どんな時にも助けてくれる、最高の彼氏なんだつて。

俺は、このNTRモノの世界に主人公として生まれ落ちた。

しかし俺は、自分の生まれた意味すら解らず、ただ漠然と、精神修行と将来への対策を兼ねて体を鍛えていた。

殆ど目的も無く、我武者羅に。

この世界の父と母が心配をしだしたので、ある程度子供らしい演技をするようになつ

た。

やり方は、自然と覚えていた。

そんな日々を送るうち、この世界のヒロインである六条ろくじょう 奏かなでと出会った。家が隣同士で、幾度となく一緒に遊ぶ事になつた。

やるつもりはあまりなかつたが、母親が言うから仕方なかつた。

そうして遊んでいる時に、猫が木から降りられなくなつていたのを見つけた。俺には関係無い事だと、見て見ぬふりをしようとした時、

「大丈夫？ 私がすぐ助けてあげるからね！」

奏が木に登つて、猫を助け出そうとしたのだ。

「ん〜！ もう少し！ もう……少し……！」

「よし！ 捕まえ……きや！！」

猫を捕まえた瞬間、気が緩んだのか木から落ちた。  
堪らず、俺は奏を受け止めた。

「んにゅ……？ あ、受け止めてくれたの……？ ありがとう！ あ！ 猫ちゃんも無事だよ！」

そう言つて屈託の無い笑みを浮かべる奏に、「なぜこんな危険な目に遭うと分かつていたのに猫を助けたのか？」と聞いてしまつた。

すると、奏は笑いながら、

「人の為に頑張れる人は、とつてもつよくてかつこいいんだつてお母さんが言つてたから！」

と、はにかんだ。

その顔があまりにも綺麗で、純粹で、とても眩しく感じて。

そして、前世を含めて初めて、俺は心の底から恋をした。

俯瞰してしか見られなかつた人生が、急に色付いて、鮮やかになつた。

そして俺は、これから来る未来を確実に、完膚なきまでに粉々にすることを固く誓つた。

これから来る未来では、主人公が弱く、愚かであつたが故に、彼女は身体を汚され、壊され、どん底へと墮していく。

認められるか……？　いいや、断じて認められることではない。

心優しく、美しく、可愛らしく、俺にとつてこの世の何よりも価値のある存在だと自信を持つて言える彼女があんな目に会うことなど、許されることではない。

そう考えた俺は更に体を鍛えた。

死ぬほど鍛えた。

死ぬほどという言葉が陳腐な位に鍛えた。

奏は、人のために頑張れる人は、強くて凄いと言つた。

ならば、俺はその言葉に相応しい人間になろう。

彼女の隣に堂々と立てるようになら。

そこから暫くはひたすらに己を鍛えた。

よく奏がそれを見に来ていたから、妥協なく心身を打ち込むことが出来た。

どんなに辛くキツイ修行だろうと、奏の為と思えば全てを乗り越えられた。

鍛える片手間に、街の悪人共も叩きのめした。

きつかけは奏に相応しくなる為という下心ありきのものだつたが、助けた人にありがとうと言われる度に嬉しく感じて、気づけば助けたいという純粹な思いから人助けをするようになつていた。

そうして鍛えるうちに、こんな事を考え始めた。

「奏を守る為には何が一番必要だろうか？」

俺は大いに悩んだ。集団を作り、統率し、その全てを奏を守る為に捧げる。

なるほどそれも良いだろう。しかし、もし謀反が起こればどうする？　スパイが潜り込んでいたら？

そして至つたのは、自身が極限まで強くなればいいという答えであった。

ちまちまとした小細工だとか、数の暴力で押勝つだとか、そういういつた弱者を真正面から叩き潰しねじ伏せる、圧倒的な力を持つ強大な「個」としての存在こそが彼女を守るために最適なのであると考え至った。

しかし、身体を鍛えるうちに成長が止まつた。

限界の壁にぶつかり始めたのだ。

伸び悩んだ俺は奏を想つて瞑想を始めた。

瞑想をしていると、奏が隣に座つたり肩に寄り掛かつてきたり、足の上に頭を乗せて眠つたりするものだから、理性の限界を試されている気分だつた。

瞑想を始め1年もすると、俺の身体の奥深くに何か暖かい物が感じられた。まるで命そのものであるかのような暖かさ。

その暖かい物を身体全体に行き渡らせるように動かすと身体中が力で満たされるのを実感出来た。

そのまま拳を振るうと……：

ドゴン！ という大きな音と共に拳の先にあつた岩が粉々になつた。

まさかと思い、手刀を別の岩に放つと……：

音も無く、岩が真つ二つになつた。

「これは……！」

拳の連撃を放つと、拳が分身しているかの様だつた。

なぜだか分からぬが、秒間で数百発は撃てた気がする……！　そういう確信がある

……！

そのうちなんだが楽しくなつてきた俺は、この力の赴くままに振るつた。  
しかし、突然人形の糸が切れたかのように倒れ込んでしまつた。

動かそうにも身体に全く力が入らない……

俺はこの世界に生まれて初めて修行を休んだ。

屈辱であつた。

そうして手に入れたこの謎の力を武器に、俺は裏の世界に殴り込みをかけた。

奏に相応しい男になるには裏社会の闇程度軽く捻り潰せるようにならなければなら  
ないと思つたからだ。

そうして裏社会の組織を叩き潰していくうちに、いつの間にやら拳聖と呼ばれる様になつていた。

裏世界の死神と呼ばれた男を打ち倒し、世界を変えようと戦う若者を友とし、世に並  
ぶ物無しと呼ばれた墮ちた英雄を討ち取つた。

そしてこの世界を裏側から操つていた賢人達と呼ばれる存在を滅ぼした俺は、奏に相

応しい男になつたと自信を持ち、告白した。

その返事は……

「もう、今更？ 私はずつと大好きだつたんだよ？ 告白なんて……はい以外の返事なんてないじゃん！」

あんまり嬉しくなつた俺は、奏に今までの事を全て話した。

しかし奏の反応はまるで重度の厨二病患者を扱うようなものだつた。

ふむ……何故だ？

まあいい、これからも奏に相応しい男として、邁進するかな。